

## 公開講座

## 演歌で学ぶ音楽の世界

幼児教育学科 教授 大久保 功治

## 【講座趣旨】

今日の社会にはさまざまな種類の音楽が溢れている。クラシック音楽、ポピュラー音楽、商業音楽等々、世界のどの街においても容易に耳にすることができる。その多様性に、我々は「音楽に国境は無い」という言葉を思い出す。しかし、それらの音楽にじっくりと耳を傾けてみると、民族的、文化的、宗教的特徴が背景に潜んでいることが分かる。本講座では、日本の演歌を例にそれらを考え、音楽の楽しみを更に深めていく。

## 【開催期日・場所】

平成30年9月22日(土) 13:00~15:00

仁愛女子短期大学 E208

## 【講座内容】

## ①国名当てクイズ

4曲の旋律を聞き作曲された地域を当ててもらおう。演奏はピアノ演奏(写真1)で行い、できるだけ旋律以外の情報を絶って聞いてもらう。演奏曲は次の4曲。ウスクダラ(トルコ・中近東地域)ジャスミンの歌(中国)野ばら(ドイツ)子守歌(宮古島・琉球地方)。結果としてほぼ、皆さん正解をする。そこで、正解の理由は旋律を構成する「音階」にあることを理解してもらおう。

## ②三分損益の法について

「音階」の構成音は地球上では例外なく半音と呼ばれる十二個の音で構成される。この十二個の音の成立理論である中国漢代の「三分損益法」を説明し、ドレミパイプ(写真2)で実習してみる。

## ③民族及び地域の音階の特徴について

十二個の半音から選ばれ構成された音組織が「音階」であるが、この音の選び方には民族・地域によって



写真1



写真2

違がある。ヨーロッパでは7つの音を使った「7音音階」が主流で「長音階」「短音階」「教会旋法」がある。中近東地域でも主に7つの音が使用されるが、ヨーロッパの音階と比べると、半音的に変化する音が特徴的である。「マカーム」と呼ばれ多くの種類が存在する。中国とその周辺地域・極東地域では、5個の音を使った「5音音階」が主流である。これにも多くの種類がある。琉球地方の音階もこの種類の一つである。

## ④演歌の音階

演歌の旋律は例外なく「5音音階」で出来ている。その他、日本では民謡、軍歌、唱歌、歌謡曲、童謡、校歌等の楽曲にも多くの「5音音階」が使用されている。また、西洋風な流行歌やJポップと呼ばれる種類の音楽の中にも、「5音音階」がさりげなく使用され、ヒットの要因にもつながっている。星野源作曲の「恋歌」の冒頭部分を紹介する。

## ⑤類似する音階を持つ地域では親しまれる楽曲は共通する傾向が有る。

歌謡曲「北国の春」のチベット版を聴いてみる。チベットのオリジナル曲であるかのような錯覚を覚える。この曲は、中国大陸、その周辺地域で人気の名曲である。また、スコットランド地方の民謡には、ヨーロッパには珍しく「5音音階」が現れることが有る。明治期、西洋音楽を我が国の音楽教育の主流として導入することが行われたが、アイルランドの「5音音階は」日本人の琴線に触れ、教材として重要な役割を果たし今日でも愛唱されている。蛍の光、アニーローリー、ダニーボーイ、故郷の空(ドリフターズの「誰かさんと誰かさん」の原曲)など多数ある。このように、近代の国境という概念は、「音階の類似性」の前では、成立しない様である。

## 【終わりに】

参加者は少数であったが、終了後の多くの質問を受けた。音楽の楽しみは文化的な音楽教養を持つことによってさらに深く広がる。今後も様々な角度から音楽を考える講座を持てたら良いと感じた。